

◆先日バスに乗っていると、いつものように **go and stop** の繰り返しだ。そのうち一人の年配のご婦人がよろけて倒れて、こめかみ部分を打って多少なりとも出血してしまった。これまでの不満でも溜まっていたのだろう、乗客の大半が運転手に向かって非難の視線を浴びせている。そのご婦人には、ここに座れとか大丈夫かとか、色々と親切に声をかけている。この事態に運転手は、近くの停留所にバスを止めて、どこかに電話連絡。おそらく医療関係かバス事務所だろう。当のご婦人は、わたしや大丈夫よ!と云って下車しようとしたが、運転手が、ちょっと待ってて、と留めている。こうなっては、このバスはもう動かない。乗客たちのそれを承知なのだろうか、そのバス停で降りて次のバスを待っている。私は、そのうちに動くだろうと思い、もう一人の乗客とそのバスの中でノンビリ座っていたら、運転手から、動かないから乗り換えてくださいと云われ、渋々次のバスに乗り帰宅した。そのため次のバスは、まるで通勤時間の山手線のように寿司詰め状態だ。イタリアで初めての超満員。帰国したら毎日がこの状態かと思うと、気が重くなった。しかも通勤時間は片道 2 時間である…。もう帰国モードになっていなければならないだろう。今はリハビリの時間かもしれない。

◆帰国間近なのに多額の寄付を取られ、詐欺に遭った私を憐れんでくれたのだろうか、仲良しの女性柔道家が、ボローニャ名物の美味しいものを食べさせてあげると云って夜 7 時 30 分に車で Pini というお店に連れて行ってくれた。Parco dei Pini(松公園)に隣接するお店だ。



夜間撮影だったのでうまく撮れなかったが平屋のお店である。その名も「松」(Pini=Pino の複数形)でマッジョーレ病院の近くにあり 13 番バスが通っている。

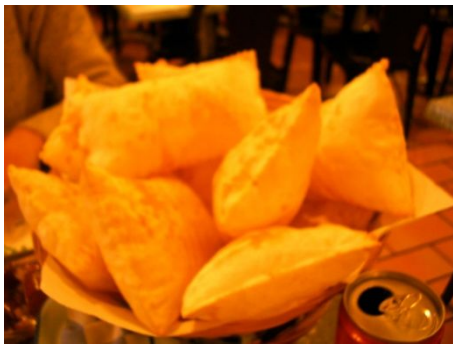
そこで名物の **tigelle e crescentine** をごちそうになった(もちろん会計時には私も払ったが)。要は、細かい色々なものを名物の **crescentine** に挟んで食べるというものだ。



前菜が出て、次にハムの盛り合わせと細かいもののセットが出てくる。



これだけは暖かいまま出てくる。特別品らしい。玉ねぎとトマトで甘みが出されている。



この **crescentine** を見たとき、私の地元の「ドラエモンせんべい」を思い出してしまった。しかしこのようにふっくら焼き上げるのは至難の業だそう。中は空洞だ。



食べ方は平たく二つに割って、好きなものを挟んで食べるというものだ。**crescentine** のほうはふっくらしたものを押しつぶして平らにして、蒲団を折りたたむようにして好きなものを挟んで食べる。ならば最初からふっくらさせる必要はないではないか、と質問したら、本当はふっくらした空洞の中に入れるのだけれど生地が薄いから二つ置きにするということだ。要は好きなように食べればよい。ただし、中に挟むモノの組み合わせには注意しないと、とんでもない味になってしまう。

二人分の **menu**(セット)に **crescentine** を一つ分追加し、コカコーラ中サイズとファン他オレンジの缶ジュース、それにミネラルウォーターの瓶を注文して二人とも満腹。これで会計は **35€**。追加注文せず、飲み物も水だけにすればもっと安くなる。故にこのお店は大繁盛。この夜も、予約で一杯で、みんなワイワイガヤガヤー日本的感覚からすると相当うるさいーに愉しんでいた。

その後、サン・ルカ教会とミケーレ・イン・ボスコ教会に夜景を見せに連れて行ってくれた。ただ残念なことに私のカメラの電池が切れてしまい、携帯電話のカメラで撮るしかなかった。実際の夜景は、写真とは比べられないほどに美しかった。特に色が美しいのだ。



サン・ルカ教会とミケーレ・イン・ボスコからのボローニャ市内の夜景。やはり携帯電話のカメラの性能が悪いのか、実際の美しさを取ることはできなかった。残念である。

最後に私の居所の近くの bar でコーヒーを飲みながらおしゃべりをし、0 時 40 分に解散。色々と気遣ってくれたことがとても嬉しかった。イタリア人のよいところなのだろう。

◆もうすぐ帰国なのでイルミネーティ教授にお礼のメールを送った。本来なら直接お会いしてお礼を述べなければならぬのだが、どうしても二人の予定が合わなかったのだ。



窓の外にも春が確実に来ている。梅の花もほころび始めた。

教授からは、貴君の留学が充実したものになったことに大変に満足していること、将来貴君の知り合いまたは教え子などが Antonio Cicu に研究留学したいときには、無料で且つ義務なしで引き受けるからその時はまた連絡してほしい、という返事を頂いた。半分はリップサービスだと思うが、将来へのつながりを何とか保てたと思う。しかしイタリア語をしっかりと習得した後でないと、私と同じ轍を踏むことになるので注意しなければ。

そこで問題発生。入国当初 Antonio Cicu の使用のために ID カードを受け取ったが、それを返却するのかが分からないのだ。日本的感覚で当然に返却するものと思って、最初に受け取った部署に入って、いつまでにどのように返却するのか聞いてみたが、担当者は「分かりませ〜ん」、つまりこの部署は当該カードを発行することが仕事で返却については他の部署にあたっしてほしいとのこと。で、教えられた法学部事務室に行ったら、ここでも「分かりませ〜ん」。そこでまた教えられた他の部署に行ってみたら、誰もいない…。結局はイタリア的タライ回し。ならばもう返却しないことにしようと思った。必要ならば先方から連絡が来るだろう。そう腹をくくって、歩き疲れた足を引きずりながら歩いていると、思わぬ人に再会できた。

以前知り合った人だが、結果として色々と迷惑をかけてしまっ、大変に申し訳ないと思っていたが、どうしても帰国前の連絡のきっかけがつかめずどうしようかと思悩んでいたのだ。それが偶然にも道でばったりと出会ったのだ。これまでのお礼やお詫びや、今までの詐欺事件等をかいつまんで立ち話をし、最後にお礼を云って別れた。心の重荷がとれた気がする。このことで疲れや重い足のことも一気に吹き飛んでしまった。本当によかった。





ボローニャ旧市街(in centro)にある昔ながらの魚屋さん。購入

した人たちは自宅でさばくのだろうか。



同じ一角にあるフル

ーツ屋さんや八百屋さん、日本でいうなら肉屋さん。来年も再来年も、この風景は変わらずにいるのだろう。

◆以前、日本から国際スピード便(EMS)で荷物を送ってもらったが、未だに届いていないことを書いたと思う。その後、帰国間近になったということでボローニャで知り合った若い日本人の友人が *apertivo* に誘ってくれたので喜んで愉しんだとき、EMS はイタリアに入ると SDA という日本でいう郵便局の関連会社のようなところの担当になるので、そのホームページで追跡調査ができることを教えてもらい、早速帰宅してから試してみた。

日本の郵便局で付置された番号、例えば EG123456789JP がそのまま使える。最初は SDA のホームページの左の一覧にある「EMS」というところで調べたが、発見すらできなかった。どうなっているのかと思い、ふとその上にある「internazionale」が気になった。ここはイタリアなので、表示を頭から信ずることは危険である。案の定、そこで私の EMS が見つかった。

しかし驚いたことに、10 回自宅に配送されたが受取人不在のため結局、日本への返送便に乗せられてすでに発送されてしまったとある。親切な女性柔道家に話したら、翌朝一番で電話で問い合わせをしてくれたが、やはり手遅れであった。しかしその 10 回の期間には私も大家さんも必ずどちらかが在宅していたのだ。何といういい加減さ!腹立たしく、悔しくもあるが、もやは手遅れなのだ。ついでにいうと、日本から EMS を送ってもらった後に発送してもらった普通要う便も、まだ未到着だ。通常なら 10 日あれば届くのだが…。上述の若い友人が云っていた。この国(イタリア)は先進国でもなければ発展途上国でもない、「発展放棄国」なのだと。まさに云い得て妙である。100%納得してしまった。現在はベルルスコーニさんが、自分に都合の悪いことを放映する番組を強制的に放映禁止にしたことに対して、多くのジャーナリストや人々が起こ

って反対集会や寄付金に基づくゲリラ放送を行っている。民主主義とは何かなどとノンビリ考えている時ではないようだ。日本ではあり得ないようなことが日常茶飯事の国。ここで一生過ごす人々の人生に幸せな未来はあるのだろうか。とにかく、イタリアへの EMS は現段階では厳禁であろう。



夜の due torri そばのマクドナルドと due torri および piazza maggiore。照明の色を意図的にオレンジ色にしている。

なんだか歴史遺産だけで生き残っている国のような気がしてきた。彼ら自身は色々とわが街の特徴は……と自慢するのだが。

◆帰国前日、仲のよい女性柔道家が、今度は昼食に誘ってくれた。以前一緒に夕食を撮った時 pizza が食べたかったのだが、もう満腹で食べられず諦めたことを覚えてくれていたらしい。もちろん自家製ではなく近くの pizzeria のものを買ってくるのだ。彼女の住む palazzo の一階においしい pizzeria があるとのこと。でも残念ながらその日は改装工事のため臨時休業。そこで私を連れだってちょっと離れた、でもおいしいという別のお店に買いに行くことになった。彼女の家族の分も含めて全部で大人 4 人分(老女、彼女、弟と私)。日本での感覚だと大判を 2 枚くらいで十分だろう。しかし彼らは pizza が好きなイタリア人である。で、注文したのが日本の大判以上はある「普通の大きさ」を 4 枚。誰が食べるのか聞くと、一人 1 枚だそうである。さらにお店の人が注文を間違えて焼いてしまった pizza があるから無料で持って行けという。これにコカコーラ 2 リットル瓶 1 本。彼女は喜々としていたが、この大きさを一人で食べるのは相当に大変である。



4 人分の pizza で、一人一枚。

そこで彼女の提案で、これまで私が教えてきた剣術を総おさらいすることになった。その palazzo の中庭でである。pizza による昼食をはさんで稽古は続けられ、合計で 6 時間も行ってしまった。もう夜である。そこでついでにと夕食にも誘われたのだ。今度は彼女の手作りパスタ

だ。しかしその動作がどうもぎこちない。とうとうお母さんが手を出し始めた。そうなのだ、顔徐は余り／ほとんど料理をしていないのだ。もっと料理もした方がよいと私が云うと、分かっている!っと仏頂面で答えている。その脇でお母さんがてきぱきと勤める。最初は「私が作るから」と大見えを切っていたが…まあ美味しければよいのだ。

出来たのはタリィヤテッレにハムとズッキーニをオリーブオイルと玉ねぎと何らかの香辛料みたいなものと一緒に焼いてものを掛けて、なじませたものだ。でもこれが見た目以上に美味しかった。空腹だったせいもあるが少しだけ御代りをしてしまったほどだ。



おぼつかない手許で…手作りの家庭料理なので見た目はいまいちだが、味は美味しかった夕食。

◆柔道場の連中がお別れ **festa** を開いてくれた。で、私が4名と演武をすることになった。棒術を教えていた男性、柔術を教えていた男性、剣術を教えていた二人の女性とである。全てはできないので、棒術は6本、柔術は7本、剣術はそれぞれ12本ずつの合計37本である。連続なので、終わった時にはかなり汗をかいてしまった。ボローニャはもう春なので気温も高くなっているせいもあった。そのあとで、簡単な手作り夕食を道場でみんなで摂って、最後に私にプレゼントが贈られた。カバンである。地元ボローニャのメーカーで地元の人が愛用してるお店のものであり、「私たちを忘れないように、愛情と友情を込めて…」などという手紙も添えられていた。



PC も入る、なかなか機能的なカバンである。もともとカバンが欲しいとおみっていたが、「塩詐欺」などにあい、購入する資金や気力を失っていたのだ。このカバンを選んだ人(上記のパスタを作っている仲の良い女性柔道家)に、どうしてこのカバンを選んだのか、あとで聞いたら、貴方が日本から持って使っているカバンがあまりにも古くボロボロだったからよ、とのことでした。



た。確かに丈夫な帆布製のものだが、角や取っ手の部分が擦り切れて、色もあせていたのだ。よく観察していると感心したが、同時にちょっと恥ずかしくもあった。ありがたく使用し始めた。

◆とうとう帰国の日が来た。仲の良い女性柔道家が、車で自宅まで迎えに来てくれて空港まで送ってくれた。ついでに私が使っていた室内用の物干し台や、真名板、若干の文房具や傘、スポーツバッグなどを譲った。使えなかったら処分するだろう。

空港でコーヒーとクロワッサンと一緒に朝食をとったあと、搭乗までしばらく色々な思い出話をしていた。彼女が最後に、イタリア語の勉強のためにと本をくれた。日本で言う「星の王子様」である。それに手紙が添えてあった。長くなるので最後の一文だけ書くと、「大切な出会い、二度とない出会い、ありがとう」である。結構、口論(けんか)もした相手からこう云われると、ちょっと胸がキュンとなった。

登場の手続き後に大切なことがある。**permesso di soggiorno**(滞在許可証)の返却である。この点はかなり長期滞在の日本人が持って帰ってしまうらしいが、そうすると次回の長期滞在に影響が出るかもしれない惧れがある。つまり理屈の上ではまだイタリアにいるのだから、不法滞在になる。でもどこで返却したらよいか分からないので、最後の検査のゲートをくぐった後に、そのあたりにいた空港関係者に対して滞在許可証を返却したいと云ったら、最初の人パリに行くなら別にいいわよ、という。しかしイタリア人の云うことだ、別のしっかりしていそうな人に聞いたら、そうそう空港警察に返却しなければならないのだよ、といい、連れて行ってくれた。そこで偉そうな人が出てきて私の許可証を受け取り部下に何か命令。部下はコピーと持ってきて、その上司と思われる人がサインし、私に渡してくれた。で、曰く、パリで警察にいろいろ聞かれたらこのコピーを見せれば大丈夫だよ、とのこと。これで一安心。**Air France**に乗った。



帰国までパスポートと一緒に持っているようにと云われた。

ひとつ幸運?があった。最初に帰国時にはブリティッシュ・エアでロンドン経由で帰国しようと考えていたが、旅行代理店の担当書の知識不足でパリ経由に変えたことは、しばらく前に書いた。ところがこれが結果として良かったようだ。帰国当日、ブリティッシュの方がストに突入してしまい飛ばないのだ。もしブリティッシュにしていたら、帰国計画に大きな影響と、相当な疲れがたまっていたことだろう。安心してパリに向かった。

※ボローニャでの出来事はもっと沢山あったが、もうここに書くのはやめよう。どれも大切な思い出になるだろうし、その関係はこれからも継続するかもしれないのだ。

**Arrivederci, ci vediamo Bologna!!**



飛行機の窓から撮影した(おそらく)ボローニャ(?)の街。ここに一年間住んでいたのだ。知り合った人たちはここに住み続けるのだ。

※イタリア関連で追加。パリについて予約済みのホテルに云ったが、イタリアの代理店から支払った筈の宿泊代金がパリの方に振り込まれていないので、チェック・アウト時に支払うか、そうでなければ宿泊できないというのだ。当日は日曜日。先方とは連絡が取れないという。私がイタリアで支払ったという領収書等を見せても、それは先方と貴殿の間のことで、パリのホテルには関係ないという。それはそうだ。仕方なくチェック・アウト時に支払うことにした。ホテル側は月曜日になったらもう一度先方に連絡してみると云ってくれた。

月曜日の午後、カウンターの前を通るとスタッフが曰く、連絡が取れてすべて解決したとのこと。でも支払いは私が行い、後日先方の会社から支払い済みの宿泊代が私の所に返却されるという。これですべて解決。ホッとして、その夜、スカイプでボローニャの女性柔道家と少しだけ話したところ、それは良かったけど、イタリアの会社はとにかく仕事が遅いから 5 ヶ月から 8 ヶ月にかかるわよ、と云われ驚いていると、彼女のお母さんも顔を出して、いやいや 5 年にかかるわよと言い出した。とにかく遅いことは確かのようなのだ。それでもイタリア国内で何か手続きが必要なら連絡してくれれば代理で行ってあげる、と言ってくれたことには感謝しなければならない。しかし、イタリア関係では最後まで悩まされ続けている。

さらに驚いたことに、パリの人はイタリア語はできない。英語で話してくれという。そこで英



語で話そうとしたが、イタリア語しか出てこないのだ!!先方の英語は聞き取れる、意味もわかる。でも自分が話そうとするときに、英語ではなくイタリア語が出てしまい、それが直らないのだ。どうしようと思いながら、とにかく成田への便に乗ることが先決と思い寢床についた。ここでもイタリア関連で悩みが続いている。

(おわり)